

## 目次

序章	霊場の考古学とはなにか	3
第1部 霊場遺跡を掘る		
第1章	吉野金峯山経塚と大峰山	30
第2章	京都六角堂―都市の霊場―	58
第3章	高野山奥之院霊場の成立	84
第4章	元興寺極楽坊―都市奈良の納骨霊場―	114
第2部 霊場への道		
第5章	山岳霊場と海への道	148

第6章	宋人造宮の経塚と霊場……………	170
第7章	霊境五臺山の宗教空間……………	190
終章	「霊場の考古学」の課題……………	212

初出一覧

あとがき

## 序 章 霊場の考古学とはなにか

### はじめに

宗教現象を考古学の方法で考察する際に、考古資料がもつ特質は、ときとして重要な手がかりを与えてくれる。かつてそこが聖地として崇められ、寺社が建立され、さまざまな宗教活動がなされていけば、そこにはなんらかの痕跡が通常残される。その痕跡は遺構・遺物・出土状態という考古資料の形態をとり、遺跡のなかで有機的な関連性を維持しており、科学的な方法によつて発掘されさえすれば、考古資料から人間のさまざまな活動の一端をあきらかにすることが可能になる。とりわけ、考古資料の空間的な広がりには、その場所がかつてどのような性格の場であったのか、あるいはどのような土地利用がなされたのかを明示し、かつての空間の性格を知ろううえで重要な手がかりを提供する。

このような考古資料の特質を活用して、中世日本の霊場のあり方を、考古学の方法によつて探つてみようというのが、本書の課題である。

周知のように、霊場については、中世史家による少なからぬ研究の蓄積がある。かつて、中野<sup>ゆ</sup> 豊

任は新潟県五頭山麓などに展開した在地靈場の歴史を、わずかに残る文献史料と経筒や骨壺などの考古資料を巧みに操作して描き出した「中野一九八八」。全国的に著名な靈場以外に、中世には地域社会に根ざした靈場が存在したという事実の発見は、民衆史的な視点とあいまって、多くの研究者に新鮮な衝撃を与えた。その後、在地靈場の実証的な研究は各地で進められ、たとえば東北地方では、伊藤清郎による山形県を中心とした精力的な調査が顕著な成果をあげている「伊藤一九九七」。

また、そうした靈場研究とは別に、靈場の情景をイメージとして定着させた社寺参詣曼茶羅の解説が盛んに試みられ、中世人の心象風景に迫る研究が多数現われたことは周知の通りである「岩鼻一九八三、黒田一九八六、大阪市立博物館編一九八七、下坂一九九三、西山一九九八」。しかし、社寺参詣曼茶羅の研究は、西山克が「特定の時代／社会の（聖なるもの）が、究極的にはその時代／社会を生き人びとの想像力の所産であると考える以上、私が読み解かなければならないのは、生身の靈場そのものではなく、特定の靈場を（聖なるもの）とみなす想像力のとばりの方であつた」と記す「西山一九九八：二五四頁」ように、実体としての靈場を研究するものではなかつた。

最近、佐藤弘夫は日本各地の靈場の形成過程を整理したうえで、靈場が「古代から中世への転換期」に成立したものとする見解を公にした「佐藤二〇〇三」。それは靈場を歴史的な所産としてとらえることで、古代から中世へと日本人の世界観が大きく転換したことをあきらかにしようとする野心的な試みであるが、大きな変化の枠組に関する仮説を提示した段階にとどまった。その後、二〇〇五年に仙台で開催された第一一回東北中世考古学研究大会での発表では、靈場の成立を「現世を唯一の存在形態とみなし、その中に異界を見ていく古代的な一元的世界観に対する、他界（あの世）

―此土(この世)の二重構造をもつ中世的世界観の形成―の反映とし、やがて遠方の靈場を勧請した身近な「ミニ靈場」が形成され、その象徴として板碑いたひが造立されたとした「佐藤二〇〇六」。さらに、近世になると「彼岸世界の縮小」が進み、往生祈願から現世利益げんぜりやくへ信仰の目的が推移したと考えた。佐藤の見解には、実体としての靈場のあり方と靈場に対する当時の人々の言説の双方が織り込まれており、実体としての靈場を把握しようとする際には注意を要する。

佐藤が発表した研究大会のテーマは「靈地・靈場・聖地」であり、東北地方各地の靈場の遺跡・遺物を取りあげ、考古学の視座から検討しようとするものであった「東北中世考古学会編二〇〇五・二〇〇六」。ここでは、阿闍羅山あしやら、国見山くにみやま、平泉、山寺立石寺やまでらりつしやうじ、松島、岩切東光寺いわきりとうしやうじ、名取熊野社、恵日寺えにちじなどの遺跡、板碑、五輪塔、笹塔婆ささとうぼ、柿経かききよ、呪符、木製模造品、陶磁器、瓦などの遺物が検討の対象とされ、考古資料に即して靈場の実体を解明しようとする多数の研究が発表された。地域的に東北地方に限定されているとはいえ、考古学の方法による靈場研究として、最初の本格的な試みであった。

ただ一つ気がかりなのは、その副題に「在地靈場論の課題」とあるように、聖地と靈場が同列に扱われたため、靈場の意義づけが不明確になってしまったきらいがある。考古学者の多くは、靈場と聖地が異なる概念であることに無頓着で、中世墓や石塔が存在する場所をなんの検討もなしに「靈場」と呼んで怪しまない。そこがなぜ靈場なのかという問いを発しなければ、学問としての健全な成長が望めないことはいうまでもないが、靈場というラベルを貼っただけで納得している現状は、今後改めねばならない。

なお、考古学の方法によって在地霊場のあり方を考察したものに、野沢均の埼玉県における事例研究がある「野沢二〇〇五」。野沢は礼拝施設をもつ墓地を「はいしよ拜所」と呼び、その性格を両墓制の「まい詣り墓」的なものと考えているが、遺跡自体は中野尙任のいう在地霊場と同一のものである。「まい詣り墓」の用語は混乱を招きかねないが、野沢の真意は、従来在地霊場とされてきたものが、はたして霊場と呼べるものなのかを問うところにあるに違いない。

こうした研究史を踏まえて、霊場の考古学的研究のための基礎的な考察をおこない、霊場の考古学の可能性を模索したいと思う。

## 1 霊場の概念

霊場という用語は、札所や霊山を指してごく一般的に使われることばだが、国語辞典をはじめとする辞書で詳細に記述されているものは案外に少ない。岩波書店の『広辞苑』で「霊場」を引くと「い霊地に同じ」とするのみで、「い霊地」をみると「神社・仏閣などのある神聖な地」とあり、「い霊場」のほか「い霊境」「い霊区」が同義語として掲げられている。三省堂の『新明解国語辞典』には「い霊験あらたかなお寺として信仰を集める所」とあり、こちらは霊場を仏教寺院に限定して使用し、「い霊地」は「い霊場のある土地」と規定する。講談社の『日本語大辞典』では「い神仏に係る神聖な場所」とし、い神仏ともに含めるが、「い神聖な土地」と規定する「い聖地」との区分が曖昧である。このように、辞書概念規定をみると、霊場が神仏と関わる場所である点は共通しているが、細部では